

「高円の 野辺の秋萩 な散りそね 君が形見に 見つつ偲はむ」

介護福祉士の明子が千さんの横に掛けながら、千さんの持っているハガキを覗き込んで、そこに書かれている万葉歌を朗読した。

千さんは今日も一人で、高円山山麓の、老人ホーム「高円苑」の前庭のベンチに腰を掛けて、ハガキを見ている。それが唯一の千さんの趣味である。千さんは自分のことや家族のことを何も言わなかったし、また老人達も知ろうとはしなかったが、不思議なことに千さん宛に頻繁に万葉歌が書かれたハガキが送られてきて、それを千さんは飽きることなく眺めているのである。

そのハガキの差出人が誰なのか、千さんは何も言わなかったが、老人達には分かっていた。それは例えば、自分の誕生日にちょっと贅沢なワインを買ったりするようなものだから、気立ての優しい明子などは、わざと老人達が集まっている所で「千さん、また千さんの大切な人から、万葉ハガキが送られて来ましたよ」と言って、ハガキを渡してくれたりするのである。

「今日は寂しい歌ですね。それ志貴皇子が亡くなった時の、野辺送りの歌でしょう」

その明子が、千さんの横に腰を降ろしながら言った。今日はもう仕事が終わったのか、綺麗なワンピースに着替えて帰り支度をしている。

「この歌は、確か高円山の麓を、信貴皇子の野辺送りの火が悲しく見えたという長歌があってその次に出てくる歌ですね。でも私思うんですけど、この歌は、このあたりの人々に伝わっていた野辺送りの歌ではないかと思うんです。だって家族の誰かが亡くなった時に悲しいのは貧しい人だって同じでしょう。それに野辺送りって、そういう貧しい人にこそ相応しいような景色に思えるんです」

千さんは、高円苑の回りの檜やクヌギの寂しい風景を見ながら、なるほどそういうことかも知れないな、と思ったりした。

その時、千さんは下の県道から分かれて高円苑に上ってくる道を、小さな車が登ってくるのに気がついた。よく見るとそれは奈良の町でよく見かける観光用の人力車で、黒いはっぴに菅笠の、車夫姿の若者が、西日をいっぱい浴びながら懸命に坂を登ってくる。千さんが驚いて見ていると、力車の若者が、こちらの二人に気がついたのか、大きく手をふっている。若者は明子を迎えに来たのだと千さんは気がついた。

「修ちゃん、力車のアルバイトをしてるんです」と、明子が言った。

その時、後ろから来たバイクを避けようとして力車が転がりそうになり、明子が思わず「あっ、危ない」と叫んだが、素早く体制を立て直した力車は、また何でもなかったように元気に登ってくる。

「修ちゃん、私に『蘭陵王の舞』を見せてくれるって言ったんです」

千さんは、明子が有名な雅楽部のある天理の大学を、この春に卒業したことを思い



出した。そして男友達の修平がその雅楽部に所属していることも知っていた。

「修ちゃん、アルバイトに忙しいからいつも裏方ばかりで、『蘭陵王』なんかやらしてもらえないのに、俺はいつか蘭陵王をやるんだって云うんです」

「ふーん、それは凄いやないか」

「全然、凄いことないんです。一年落第してるし就職も決まらないし、でも私決めたんです。一生かかっても構わないから修ちゃんが私のために蘭陵王を舞ってくれるのを信じようって、決めたんです」

そう云うと、明子は千さんにピョコンと頭を下げて、ようやく門の前に辿り着いた力車のほうに走り去った。

10月の或る日、千さんは奈良町の大乗院庭園の休憩所にいた。休憩所の硝子戸を通して、秋色の漂い始めた大乗院の庭園と古風な奈良ホテルの建物が見える。千さんの横には車夫姿の修平が座っていた。千さんは今日、修平の力車で何十年と親しんだ奈良の町を散策したのである。

「この近くに、大乗院に仕えた雅楽の奏者たちが住んでいた『楽人長屋』があったそうや。表にある中国風の土塀は、それを模して作られたもんじゃないな」

「ええ、周囲に音が漏れないように、厳重に囲っているので入口が小さいんですね」

「私が南都楽所（がくそ）で働いていた頃も、あんな塀が残っていたなあ」

修平は明子から、半年前に「高円苑」に入所した千さんが、南都楽所で雅楽を学び、奈良の有名な寺社で社務所の事務をしながら、横笛の奏者として一生雅楽に携わって来たことを聞いていた。いわば修平の大先輩にあたるわけである。

雅楽は、宮中や寺社などに伝わる日本古来の音楽だが、五世紀ごろに大陸から伝わった儀式用の楽舞が元になっているといわれ、大仏開眼法要を頂点として、奈良時代にはアジア各国の音楽が、色々な楽器で広範に演奏されていた。中国大陸から伝わった音楽を『唐楽』、朝鮮半島や渤海国から伝わった音楽を『高麗楽』と呼んでいる。

「そやけど、奈良時代の雅楽が本当はどんな音楽やったんか分かれへん。絵や文字と違って、音楽は残すことは出来へんし、誰も聞いた者はあれへんからなあ」

「賑やかで楽しい音楽やったんと違うでしょうか。例えば唐楽といっても長安や洛陽で流行していた胡人の宴会用の音楽が、そのルーツだと言われているでしょう」

「西の京の薬師寺の塔のテッペンで、天人が横笛を吹いたはるの知ってるか。いつか私もあんな風に吹いてみたいと、若い頃は思ったもんや」

「はい、分かるような気がします」

「蘭陵王は唐学の壱越調（いちこっちょう）の一人舞いやったなあ」

「はい、華麗で伸びやかな動きの走り舞です」

「最初は小乱声（こらんじょう）で、竜笛の独奏、それから陵王乱序（りょうおうらんじょう）で、この時は竜笛と打ちものが波のように、激しく豊かに響きあう……」

千さんは、何かを思い出すように胸を反らすと遠くの空を眺めた。それから、「蘭陵王を舞ってみたいか」と、修平に言った。

蘭陵王は中国の北斉の将軍、蘭陵王高長恭の逸話にちなんだ曲目で、眉目秀麗な名将であった蘭陵王が、優しげな美貌を獐猛な仮面に隠して戦いに挑み、見事大勝したため、兵たちが喜んでその勇士を歌に歌ったのが、曲の由来とされている。

老人ホーム「高円苑」の前庭に、舞楽の舞台に見立てた毛氈を敷き、修平の「蘭陵王」が披露されたのは、11月の良く晴れた日の午後だった。観客はホームの老人たちと職員だけで、その最前列の中央の椅子には、明子が座っていた。

蘭陵王の舞手は龍頭を模した舞楽面を着け、緋色の紗地に刺繍を施した袍（ほう）に、袖なしの貫頭衣を着装し、金帯をつける。今、修平が着装している蘭陵王の衣装は、千さんが現役時代の友人を頼って借りてきた、有名寺社の舞楽法要時に使用されるものだった。その千さんは普段着のままでも椅子に座り龍笛を奏していた。

その音色は、まるで鳳凰が舞うように、時に喜色を帯び、リズムカルになり、かと思えば厳粛になり、悲壮になる。それは始めて雅楽演奏にふれる老人達にも、十分に驚きと感動を与えるものだった。何より彼らは、いつもの千さんとは別人のような凛とした姿に驚いていたのである。

千さんの龍笛に比べると、修平の蘭陵王は気の毒なほどギクシャクとしたものだった。しかし彼は千さんの笛に誘導され、励まされて懸命に舞っていた。そして、老人や職員たちが龍笛に心を奪われる中で、明子だけは只一人、震えるように蘭陵王の舞だけを見つめていたのである。

千さんは楽しかった。生まれて始めて、まるで天人のように、自由に大空の中で横笛を吹いているような感じがした。そして千さんは懐かしい久子の声を聴いていた。（あなた、思い出したわ。50年も前にあなたが私に言ってくれたこと。そう、私に『蘭陵王』を見せてくれるって言ってこと。あの頃私たちはまだ学生同士だった。私たちは結婚して、夢中になって生きてきて、とうとう私はあなたの蘭陵王を見ることは出来なかった。でも、あなたの横笛は聴こえる。はっきりと聴こえる。ほら、私は大空の風になったから、あなたの横笛の音は聴こえるわ……。）

それは年の瀬も押し詰まった12月の或る日のことである。

千さんは、高円苑から歩いて20分程のところにある白豪寺の下の集落の郵便ポストにハガキを投函しようとしていた。すると突然一陣の風が起こり、ハガキが千さんの手を離れてフワフワと舞い上がって、少し先の道に落ちた。千さんが慌てて追おうとすると、そこに一人の老婦人が佇んでいる。婦人はハガキを拾いあげると、よく通る声でハガキの歌を詠んだ。

「采女の 袖吹きかへす 明日香風 京を遠み いたづらに吹く」

久子である。久子は千さんに笑顔を向けると

「あなた、ちゃんと憶えてくれたのね。これは私が初めてあなたに出したハガキの万葉歌。私、何枚も何枚もあなたに万葉ハガキを送ったわ。その歌をあなたは全部憶えてくれた。だから今日はご褒美に、50年ぶりに私の万葉ハガキをあなたに送ってあげましょう」

そう云って、久子は別のハガキを取り出して千さんに見せた。それは遠い昔に千さんの元に届けられた、柔らかな女文字の万葉はがきと同じ筆跡で志貴皇子の歌が書かれていたが、表の宛名は

「奈良市 町 高円苑気付 千正男様」と、なっていた。 (終わり)



9月12日 田原御陵から山村の里へ

今月は何とか歴史に取材したものを書きたいと思って、固く決心したんです。で、今回僕が選んだ主人公は「高野新笠」。そうです、桓武天皇と早良親王の母親です。理由は名前が面白い。「ミス秋祭り」という感じで爽やかな響きです。それにこの人の生んだ桓武天皇の皇統は、現在の皇室まで続いているということが馬場先生の説明にもありましたが、そうするとこの人は大変なグレートマザーじゃないですか。面白い、ドラマの主人公に相応しい。で、続日本紀で調べると、桓武天皇の延暦八年(790年)12月28日に「皇太后(高野新笠)が崩じた」という記事があり、その後に彼女の出自について、こうあります。

「皇太后、姓は和(やまと)氏、名は新笠、贈正一位の和乙繼の娘である。・・・後の祖先は百済の武寧王の子の純陀(じゅんだ)太子から出ている。・・・百済の遠祖の都慕(つも)王は、河伯(かわのかみ)の娘が太陽の精に感應して生まれた・・・」

要するに、百済系の渡来人の末だという訳です。ますますこれはエキゾチックな感じも漂って面白い、という訳で、新笠さんの軽い小さなお話を書こうと、夏空を睨んで考えたんです。で、今月の冊子を隅から隅まで読んでみました。最後に系図の表を睨んでみたんですが、この人の周りに出てくるのは井上内親王とか、他戸皇子とか、早良親王とか、藤原種継とか、非業の最期を遂げた人ばかりで、うーん、これは難しい。どう考えても軽い明るい話は作れそうにないし、熱帯夜はまだまだ終わりそうにないし、あんまり関わりすぎると怨霊に取り付かれそうだし、という訳で……。今回のお話は、去年NHK奈良の万葉ラブストーリーコンテストに応募した時のものを元にして書いたものです。もちろん落選したことは言うまでもありません

夏空の下、奈良の奥山、稲田と茶畑の広がる田原の里から、杉林と竹林の続く菩提山道を歩きました。古代史の中で数奇な運命を背負った三代の皇子たちの墓所を訪れました。高貴な生まれ故に仏門に追われた姫の尼寺を訪れました。

それにしても暑かったですね。昼食の時に配られた冷えた葡萄は本当に美味しかった。杉林の道で分けてもらった冷たい水は本当に美味しかった。そしてこの日の風呂上りの一杯は……。これらが今日の全てです。異論のある方はないでしょう。